しあわせ商店街

太田燕雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
しあわせ商店街

【Ｎコード】
Ｎ４３６９Ｃ

【作者名】
太田燕雀

【あらすじ】
ある片田舎の商店街。洋服店店主の前に、突然アルバイト志望の女子高生が現れてから、商店街に恋愛の風が吹き出す…。

1

1.

妻に先立たれて以来日課となっている店前への盛り塩を終えると、鯛三は大きく背伸びをした。特に必要な作業でもない。ただ昔から妻の習慣だったからで、客寄せのおまじないなんて馬鹿馬鹿しい、と思っていた。視線の先には青空が広がっていた。以前はこの商店街にもアーケードがあったのだが、一昨年の冬に、支柱の老朽化を理由に撤去された。積雪があると、不気味に軋んだので、組合話し合いのもと、撤去が決まった。それでも、古びた景観にもかかわらず、商店街は人通りも多く賑わっていた。それには近隣に大手のスーパーマーケットや百貨店といったものがないからで、この商店街を利用しないとなると、5つほど向こうの駅まで“買出し”に行かねばならなかった。だから、この商店街で手に入らない品物が必要にならない限り、普段の生活物資は充分ここでの買い物で事足りるわけである。とりわけ“うをすぎ”の魚の鮮度と値段は評判がよく、噂を聞きつけて数駅ほど電車を乗り継いで買いに来る客もいるほどだった。海のないこの土地で、これだけの鮮度を保った魚を扱っているところはそうない、と言う客もいた。

店内の支度を終えると、鯛三は“うをすぎ”へ向かった。向かわずとも、自分の店を出てまっすぐ正面をみれば、そこは“うをすぎ”である。わずか10歩ほどの距離だった。

「おはよう。めざしをくれないか」

調理場を覗き込んだとき、カツヨは鰤を捌いていた。鰓から出刃包丁を突き入れ、下顎のつながった部分をはずす。腹を割いて、鰓の付け根を切る。そのまま鰓を引っ張れば、はらわたまで一緒に取れる。あいかわらず見事な手さばきだ、と鯛三はおもった。

「なんだって？」
目もくれず、声だけが飛んできた。
「いや、めざしが欲しいんだが。なんだか急に食べたくなってね」
「めざしならそこの塩干物の冷蔵棚にあるから、持っていっておくれ。お金はその辺に置いてってくれればいいから」
面倒そうに包丁の切っ先で指示しながらも、視線はやはり鯛三のほうへは向かなかった。
「まだ開店前だってのに。そんなものは買い置きしとくもんだ」
「いや、すまないね。朝食のことまで考えてなかった。家内がいなくなったら男ってのは駄目だね。お金、かごに入れとくから」
ちょうどの金額は持ち合わせてなかったので、釣りはいいよ、と聞こえないように言いながら、店を出た。
台所はずいぶん散らかっていた。シンクには昨日ラーメンを茹でた鍋、サバ缶を開けた小鉢など。その下には、それ以前の使用物が埋まっているはずだ。
めざしのパックを破ると、1匹ずつ丁寧に焼き網に置き、コンロの火を点けた。たちまち白い煙がたちこめたので、鯛三はあわてて換気扇を回した。いささか心もとない回転音がしていたが、煙が店内に流れ込みさえしなければいい。少し火を弱めると、テーブルの上のラジオをつけた。スピーカーから軽やかなピアノの音が流れてきた。鯛三は思わず口笛の音を重ねた。曲名は記憶から出てこなかったが、聞きなれたメロディから、弾いているのはセロニアス・モンクだとすぐ判った。ラジオをつけた時点で曲は終盤だったので、しばらくしてフェイドアウトし、違う曲が流れ出した。ボリュームを少し絞って、台所に戻った。
「ごめんください」
店のほうから女性の声が聞こえた。それは腹の底から出したような大声で、おそらくそれまで何度も呼んでいたのだろう。
「すみません。まだ、開店前なんですがねぇ」
客の顔を見るまでに呟きながら売り場にきてみると、声の主は若

い女性、まだ女の子という表現のほうが当てはまるような年齢である。少女の姿がこの店内に存在するだけで異様な気がした。訝しげに、鯛三は老眼鏡をはずしながら言った。
「すまないがね。うちには若い女の子向きの服はないよ。ブティックみたいなお洒落な店じゃないんだから」
少し愛想笑いを含めながら言うと、少女はため息をつきながら言った。
「そんなこと、見ればわかります」
外した老眼鏡をかけなおしながら、じゃあ、どうして、という怪訝な顔をすると、少女は続けざまに言った。
「アルバイトがしたいんですけど」
目の前に“履歴書在中”と書かれた封書を突きつけられた。鯛三は、どんな顔をすればいいのかわからないという顔で、おもわず封書を受け取った。
「いや、しかし」
もう一度老眼鏡を外して、封書の中を見た。たしかに履歴書が入っている。からかっているのか。相手の表情を窺うが、真剣な表情だった。
「アルバイトの募集はしていないんだよ。見てのとおり、小さな店だし、客も少ない。私ひとりでももてあましてるってのが正直なところでね」
少し照れくさそうに言うと、少女は、
「なんでもします。1ヶ月だけ、使ってもらえませんか？」
「だから」
ため息をつきながら、履歴書に目を通した。この商店街から2駅ほどむこうの高校に通っているらしい。添付された写真はみたことのある制服姿だった。
「なんでもするって言ったって、してもらうことがないんだよ。客が来たら適当に服を勧めて、お金をいただいて、ありがとうございます、と言う。あとはたまに掃き掃除をしたり、商品を整えたりす

るくらいなもんだ。そんなことは私ひとりでできるんだよ」
少女は店内を見渡した。人ひとり通れるだけの入り口。その横にショーウインドウがあって、マネキンが1体展示されていた。中も数体のマネキンと、商品棚で構成されている。しばらくそれらを眺めたあと、少女は決意したように、少し笑顔で言った。
「ショーウインドウに入って、マネキンやります」
鯛三は言葉を失った。咳払いをひとつして、「あのね」と、反論しようとしたが、台所から焦げた臭いが流れてきたので、あわてて走っていってしまった。

2

2.

翌日、鯛三は日課だった盛り塩をしなかった。さて、砂糖でも盛っておけば客は来ないだろうか、などとくだらない方向へしか、思考は働かなかった。

シャッターを開けたとき、すでに少女は店前に立っていた。手には大きなボストンバッグ、まさか住み込みで働かせろ、とは言われまいかと焦ったが、これは杞憂であった。

「まるで家出少女だ」

鯛三のつぶやきに、少女は耳もかさなかった。

「衣装はお店にある服を着ます。かばんの中は小道具とか、化粧道具とか。メイクに時間がかかると思ったから、ちょっと早めに来ました」

「君ね。私は雇うとは言ってないよ。勝手なことをされちゃ困る」

「あ、お給料はいくらでもかまいません。ただ働きはちょっと・・・だけど、時給百円でも、文句はいいませんから」

少女の表情は少し頑なに見えた。開店前まで待ってみよう。きっと考え直すに違いない。鯛三は憮然としながらも、少女を奥の部屋へいざなった。とはいうものの、朝食は、なかなか箸が進まなかった。脳裏に浮かぶのは奇異の眼で通り過ぎる人々。耳に聞こえるのはカツヨの嘲笑。口に運んだ朝食は、すべてため息に押し返されていた。

少女は奥の部屋の、かつて妻が使っていた化粧鏡を使って衣装合わせをしている。

「君」

なんとなく場の空気を持て余して声をかけた。

「市原英美です。市原さんでも、英美ちゃんでもオッケーですよー」

間延びした答え方。モデルにでもなったつもりなのだろう。子供のいない鯛三には、相当扱いに苦労しそうな相手だった。鯛三は箸を置いた。
「おじさーん」
「平坂さんと呼びなさい」
「平坂さん、向かいの魚屋さんって、繁盛してるの？」
益体のない問いだった。時折、衣擦れの音が聞こえてくる。
「ああ、大繁盛だよ。鮮度も品揃えも抜群、その上安いときたら、お客さんも黙ってないよ。最近じゃあ臨時のアルバイトまで雇う予定らしいよ。張り紙がしてあったろ？」
「うん。してたねー」
アルバイトがしたけりゃ、うをすぎでやればいい。時給はたしか千円とか言っていた。おまけにやることはいくらでもある。まったくもって不可解な少女だった。
「もし、もしもだよ。君が・・・英美ちゃんがショーウインドウに立ってマネキンをやったら、お客様はどういう眼で見ると思う？」
「そりゃあ、『こんな着こなし方があるんだわ。着てみようかしら』とか思うんじゃないですか？」
それを聞いて、鯛三は大きくため息をついた。
「私、マネキンだからって、ずーっと同じ格好で立っているわけじゃありませんよ。時折ポーズを変えて、お客様にアピールするの。そのへんが『生きたマネキン』のセールスポイントでしょ？」
「もう何を言っても無駄なんだね」
少しうなだれ気味に、レジスターのつり銭を確認に店内へ向かった。
「なんかネガティブだよね。もっと良い方に考えたらどうですか？」
もう鯛三には反論する気力もなかった。
英美が勝手にマネキンを片付け、空っぽになったショーウインドウ越しに、うをすぎが見えた。あの奥の調理場では、今日もカツヨが忙しく魚を捌いているのだろう。そうだ、あの娘をカツヨに紹介してやろう。働きたくてしょうがない、若い力だ。きっとカツヨも快

諾してくれるに違いない。善は急げとばかりに、鯛三は店を出た。
「杉田さん。カツヨさん」
うをすぎの店内に入る手前から、大きな声で呼びかけた。カツヨは眉間にしわを寄せて奥の調理場から顔をのぞかせた。
「何だい。昼行燈が朝から珍しく大きな声を出して。私ぁ忙しいんだよ」
「いや、あんたの所、アルバイトを募集してたろう？いい子がいるんだが、使ってやってくれんかね？」
カツヨは一瞥もくれずに作業を続けていた。鯛三は続けざまに言った。
「高校生でね、女の子なんだが、しっかりした娘だよ。おたくの仕事にはぴったりだと思うんだが」
カツヨの手の出刃包丁の動きが止まった。睨み付けるようにしてカツヨは言った。
「そんないまどきの若い娘が、こんな魚の臭いにまみれて仕事をしてくれるとは思えないね。それにアルバイトなら、もう一人採用したんだ。一人で充分だよ」
カツヨの手がまた動き出した。鯛三は肩を落とした。当てが外れたのだ。これから自分の店のショーウインドウでは、奇妙なファッションショーが行われ、世間から白眼視されるのだ。鯛三はとことん落ち込んだ。うなだれ気味にうをすぎを出ようとしたとき、店前に若い男が立っていた。歳は二十歳くらいだろうか。細身で背の高い男だ。二人のやりとりを聞いていたのか、入りづらそうな顔をしていた。
「今日からアルバイトでお世話になります」
金色に染めた髪、だらしない服装。そんないまどきの若者の風貌に似合わず、丁寧に頭を下げた。鯛三は少したじろいだ。
「ああ、私はここの者ではないよ。店主なら、こちらにおられるから」
男は少し決まりが悪そうな顔をしていたが、気を取り直してカツヨ

に挨拶をした。やはり、深々と一礼していた。

店に戻ると、英美はショーウインドウの掃除をしていた。家から持ってきたらしい窓掃除用のスプレーとスポンジを手に、時折息を吹きかけたりして磨いている。実に入念な作業だった。

「ここの汚れ、取れないなぁ」

耳障りな音をたててこする。爪で掻き取ろうとするが取れない。英美は唇を尖らせてへたり込んだ。

「取れないだろう。私の妻もそうやって磨いていたが、それだけは取れないとあきらめていたよ」

英美は大きく深呼吸をして振り返った。

「平坂のおじさんは磨いたの？」

「いや。妻の仕事だったからね、それは」

英美が、また唇を尖らせた。

「亭主関白。いやな感じ」

取れない汚れは英美の胸の辺りの高さにある。外から見れば服が汚れているように見えるかもしれない。英美は店内のマネキンをショーウインドウに立たせ、外から眺めてチェックしたりしていた。

「やれやれ。熱心なことだ」

鯛三はすっかり他人事のように言うようになっていた。それは、妻にも言っていた言葉だったかもしれない。自分の店を綺麗にしている妻に向かって、確かこんな冷たい言葉をかけていたような気がする。なんとなく、そんなことを思い出すと、恥ずかしいような、申し訳ないようなものが、心につかえた。

「そういえば、アルバイトの動機を聞いていなかったね。お金が欲しいのなら時給百円でもいいです、なんて言わないだろうし。だいいち、どうしてうちの店なんか」

入り口をくぐりかけていた英美に、鯛三は問いかけた。

「うーん。ただ働きたかった、ということにしときます。このお店に決めたのは、素敵なお店だと思ったから、ということにしときま

す」
ただはぐらかされているだけだった。鯛三は少し腹立たしくなってきたが、言葉にはできなかった。口下手な自分に、また腹立たしくなってきた。
「マネキンだけじゃ物足りないだろう。接客もレジも、やりたければやればいい」
鯛三はすっかり投げ槍になった。
「はーい、そうしまーす」
英美はまた、あの汚れと格闘しだした。

開店の時間がやってきた。英美は最後の衣装チェックを済ませ、ショーウインドウに入った。つい口からでてしまったにしても、店の仕事をすべて英美に任せるといってしまった鯛三は、店の奥でおろおろしていた。仕事の経験がなければ、うまく接客もできないではないか。おつりを間違えられたら、うちも困るし、お客様にもご迷惑をお掛けする。やはりお金のやりとりだけは自分がしよう。そう決心して店内に入ると、ショーウインドウの前には人だかりができていた。鯛三が恐れていた光景だった。大勢の人間が、自分の店の前に集まり、ざわざわと騒ぎ立てている。鯛三は床にへたり込んだ。
「ああ。やはりこうなってしまったか」
そんな鯛三の気持ちも知らずに、英美は次々とポーズを決めてゆく。若い男は好奇の眼で、買い物かばんを提げた主婦は怪訝な顔をしながらも、隣の知り合いらしき主婦と、英美を指差しながら着こなしについて話しているような手振りをしていた。
人が次々と入れ替わってゆく。徐々に女性の比率が増えてきた。嘲笑するような顔の女性もいれば、熱心に見入る人もいた。
「平坂さーん」
ポーズを変えながら、英美が呼んだ。
「もう、好きにしてくれ」
英美がまた唇を尖らせた。

「そうじゃなくて。今、外でこの服の説明とかしたら、お客さんがいっぱい入ってくると思うんだけど」
英美の言葉は真剣だった。くだらないことだと思っていたことを、英美は真面目に考えているようだ。自分も店主として彼女の行動を黙認してしまった以上、どこか腹をくくらなければならないかもしれない。
「どうしろというんだ」
「そんなこと、自分で考えてよ。洋服やさんなんでしょ？洋服のお話をするに決まってるじゃん」
英美が言うことを想像してみると、鯛三は顔から火を噴きそうだった。前代未聞の洋服店。若い女がショーウインドウでファッションショーよろしくポーズを決め、店主は横に控えてトーキー映画のように洋服の説明をまくしたてる。さあ、寄ってらっしゃい見てらっしゃい。本日入荷されたばかりの新作だよ。そこのお嬢さん、そのスカーフにとても合うとおもいますよ、いかがですか？鯛三の頭の中で、そんな光景が浮んでいる間に、店内には二人の女性が入ってきていた。われに返った鯛三は、気を取り直して、何事もなかったように装いながら、しかし顔を引きつらせながら店内の洋服を勧めていた。

それからも数人の客が店に入ってきた。入り口のドアが開くたびに、そとの喧騒が店内に入ってくる。かつてない状況に鯛三は戸惑った。今までだって日に数人の客はあった。しかし一度にこれだけの客が入ってきたことなどあっただろうか。鯛三はただ「いらっしゃいませ」とだけ言って会釈していた。
「平坂さんも大胆なこと考えたわね。あんな若い娘をショーウインドウに立たせるなんて」
鯛三には、その言葉の意味をどう解釈すればいいのかわからなかった。侮辱なのか賞賛なのか。どちらにせよ、自分が考えたことではないし、やれと言ったことではない。

「いやあ、あの娘が考えたことでしてね。私は反対したのですが」
鯛三はどちらの意味とも取れる弁明をした。相手は月に一度は顔を見せる馴染みの客だった。
「いいんじゃないの。不景気な世の中だしさ、なにか商売も工夫しなくちゃね。でも」
その客は入り口の外を見た。
「うをすぎの奥さん、いやな顔してたわよ。自分の店の前まで人だかりが来ちゃうもんだから」
鯛三はしまった、と思った。自分のことで頭が一杯になって、周囲に迷惑がかかることまで気が回らなかった。思うと同時に、鯛三は店を飛び出していった。
「みなさん、当店にご来店のみなさん、他のお店のご迷惑になりますので、お買い上げにならない方はどうか立ち止まらないでください」
滅多に出さないほどの大声で、店頭の客に呼びかけた。人垣は徐々に減っていった。ほとんど好奇心で見ていた客だったという証拠だ。減りつつある人垣の隙間から、英美の膨れっ面が見えた。

夕暮から赤みが薄れてきたころには、ショーウインドウのマネキンはいなくなっていた。また妻の鏡台のある部屋から、衣擦れの音がしていた。
「平坂さん、売り上げ、どうでしたか？」
平然とした問いかけに、鯛三は答えなかった。
「結構お客、入ってたよね。貢献できたかな、私。ねえ、おじさんってば」
「平坂さん、だ」
「いるんなら答えてよね。それとも、何か怒ってる？」
「こんな馬鹿げたことは、もうやめだ。給料はちゃんと支払うから、明日からは来なくていい」
明らかに怒気を含んだ言葉に、衣擦れの音が止んだ。そして、何か

を壁にぶつけたような音がした。
「何よ。駄目なら駄目って、最初から言えなかったの？なにも言わなかったじゃない。私が客寄せしたら、おじさん、ちゃんと応対してたじゃない」
「私がどれだけ恥ずかしい思いをしたとおもうんだ」
「だから。だったらはじめから駄目だって言えなかったの？」
向こうの部屋に通じる引き戸から、鯛三は目をそらした。英美の言い分には、道理があり、非は弱気だった自分にある。英美は真面目に仕事をこなしたのだ。それがどういう方法にあったにせよ、結果はその日の売り上げに見えていた。普段の収益の5日分はあった。
「君は恥ずかしくないのか。あのガラス張りの部屋で、人々に見られることが」
英美の姿を見て入ってきた客がいることは事実だ。しかし、それ以上に嘲笑の眼で観ていた者が多かったはずだ。とてもそれが非常識なことだからだ。
「恥ずかしくないわけないじゃない。ムカツク顔で、にやけながら通り過ぎる奴だっていたよ。軽蔑してるような奴も」
「だったら、どうしてこんなことを」
しばらくは、答えは聞こえてこなかった。台所で沸かしていたヤカンが白い湯気を噴き出していた。
「1ヶ月だけでいいんです。お願いします」
自分が聞きたかった言葉とは違った。しかし、鯛三はなぜかこれ以上問い詰める気になれなかった。英美の声が、哀切感を漂わせていたからだ。
「ごめん。ごめんくださいよ」
店のほうから、しわがれた声が聞こえた。シャッターはまだ閉めていなかったから、客が入ってきたのだろう。鯛三は売り場へ向かった。
「はいはい。なにかご入り用でしょうか」
売り場に入ると、老人が一人、商品棚を漁るようにして見ていた。

「おや、これは桃地さんじゃないですか。お店はまだ開けておられるのでは？」
客は桃地書店の主だった。老眼鏡をせわしなく取ったりかけたりしながら、商品を見ている。
「平坂さんも、おもしろいことを考えなすったね。あんな若い娘をマネキン代わりにするなんて」
冷たい言葉に聞こえた。鯛三は、耳まで紅潮し、思わずうなだれた。
「いや、あれは。彼女が考えたことでして」
言い訳にすぎないとわかっていても、言わずしてその場にいることができなかった。
「誰が考えたかなんて、わしは知らんよ。しかし、あんたの店で、それが行われたことに、違いはあるまい」
桃地庫之助は鯛三より６つ年上だが、顔はもっと年上に見えるほど、老けていた。それに、眼光は鋭く睨んでいるようなので、客は逃げるようにして金を払って出てゆくのだと、庫之助の孫が言っていた。繰り出される言葉も、投げ掛ける視線も、なんとなく冷たい感じだった。
「私もあの娘が着ていた服がいいとおもってな。うちの家内に買ってやろうとおもって来たんだが」
今日、英美が着ていた服は、どちらかというと中年女性が着るようなデザインだった。若い英美が着ると、センスの良い服に見えたのだろうか。そうだとすれば、英美にとっては、してやったり、なのだろう。
「ああ、あの服なら。少しお待ちを」
まさか、英美が着ていたものを、そのまま渡すわけにもいかない。鯛三は裏の小さな倉庫に向かった。確か、在庫があったはずだ。
「ああ、あった」
安堵の声を出して、鯛三はまた売り場へ戻った。
「これでよろしかったでしょうか」
鯛三は、持ってきた服を広げて見せた。

「ああ、これだ。もらっとくよ。いくらだい」
「一万二百九十円になります」
「そうかい。じゃあこれで」
「はい。ではお釣りの七百十円でございます」
庫之助は、お釣りを確認もせずに、ポケットにしまった。
「ありがとう。家内も喜ぶだろうよ」
「ええ。そうですと私もうれしく思います」
鯛三は深々と頭を下げた。ドアの閉まる音を確認すると、無意識に大きなため息をついた。
どんな言葉にせよ、自分の店のことを言われると、頭に血が昇るような気分だった。庫之助の言葉は、褒め言葉にもとれるが、遠まわしに軽蔑しているようにも聞こえた。
「お客様？」
英美が奥から顔をのぞかせた。上着のボタンを留めながら、髪を上げた。
「君の営業努力の賜物だよ。たいしたもんだ」
言葉とは裏腹に、鯛三は英美を白眼視した。それは恥をかかされた恨みを含んでいた。
「へえ。よかったですね。明日からもがんばらなくちゃ」
鯛三の気持ちも知らずに、英美はなおやる気を出したようだった。
鯛三は、また何も言い返せなかった。

早朝、鯛三はいつもより早く目覚めた。身体を起こすと、妻の眠る仏壇に目をやった。
「この店も、もう終わりかもしれない。すまないな」
普段着に着替え、朝食もすませたが、盛り塩はしなかった。もうすぐ英美は来るだろう。どういう態度で臨めばいいか。自分は恥をかいたとおもう。しかし、英美のやったことは明らかに売り上げの数字に結果としてあらわれていた。彼女のやったことは、社会的に認知されていることなのだろうか。からかい半分、真面目半分の客が

まじっていていては、その判別も難しかった。

「おはようございます」

翌日、昨日と同じ時間に、英美が現れた。鯛三は無言で奥の部屋にむかった。鯛三には自分の考えていることもわからないくらい苛立っていた。何事も悟らぬ顔で、英美も奥の部屋へむかった。

「今日は、このスーツにしようとおもうんですけど」

いつのまにか、英美は売り場から一着のスーツを持ち出していた。

「売り物を勝手に着られちゃあ、売り物にならないんだがね」

視線はどこに向いているのか、鯛三自身もわからなかった。ただ、軽蔑の念をこめて言葉を発した。

「そんなもんなんですか？じゃあ、この服はお給料がわりってことで」

身勝手な判断だった。鯛三は言葉を荒げた。

「勝手にもほどがある。いい加減にしろ」

怒声のあとに、静寂が耳に痛いほど広がった。妻の部屋から、衣擦れの音が止まった。鯛三自信も予期せぬ、大声だった。

「ご迷惑ですよね。わかってるんです。でも」

沈んだ声が、一層静寂さに臨場感をもたせた。

「お願いします。一ヶ月だけ、一ヶ月だけでいいんです。お給料もいりません」

切実に、懇願する言葉だった。静寂が、どのくらい続いただろう。鯛三はため息をついた。

「理由は。私の店で、あの方法で仕事をしなければならないわけはなんなんだ」

英美が座り込む気配がした。

「お向かいのお店、アルバイトの人、はいったんですよね」

鯛三は無言で頷いた。

「あの人、一馬さんっていうんですが。好きなんです、彼が」

鯛三は視線を遠くした。換気扇が、外の空気に回されていた。

「でも、彼は私のことなんか知りません。年も違うし、住んでるところだってはなれてますから」
こんなとき煙草でも吸えたら、と鯛三は思った。英美の言葉が続いた。
「見て欲しい。せめて、見知らぬ女の子としてでも、彼に見ていてほしかった」
またしばらく、静寂が続いた。外からは虫の声が聞こえてきた。ふと、過去が見えたような気がした。
「彼は、ストリートミュージシャンで、いつもＩ駅の前でライブをやっていました。最初は関心がなかったのに、何度か聴いているうちに惹かれちゃって」
実にいまどきの少女らしい、恋愛話だ。なんとなく鯛三は、妻の遺影を見つめた。
「それならそう、彼に伝えればいい。恥ずかしいかもしれんが、それをしなくては進展しないだろう」
英美は言葉を詰まらせている。虫の声は一層大きくなってきた。
「彼、ニューヨークへ行くらしいです」
自由の国アメリカきっての大都市。夢を持った若者は、あの国を目指している。
「それが、一ヵ月後かね」
「はい」
商店街のほうから、酩酊しきった大声が聞こえてきた。鯛三はそれに腹が立った。
「旅費と、生活費を稼ぐためのアルバイトだとおもうんです。直接訊いたわけじゃないけど。ほかにも、いくつかアルバイトはしているらしいです」
鯛三は、しばらく無言で妻の位牌を見つめていた。
「そうか。そういうことだったのかい」
その日も、英美はショーウインドウでポーズをとり、鯛三は客の対応に追われた。先日と同じ、過去に経験したことのない多忙な日だ

った。

「お疲れ様でした」

深々と一礼した英美は、店を後にして、駅に向かった。鯛三はそれを見送ると、店のシャッターを下ろした。そのときには、他の店はとっくに閉店していた。時計の針は九時を指し、遠くから犬の遠吠えが聞こえた。

レジスターから売上金を取り出すと、鯛三は大げさに身体を揺らして卓袱台の前に座った。老眼鏡をかけてみてみると、その金は目映く光って見えた。ため息が、静寂を破った。

「たいしたもんだ。一日でこの売り上げか」

歓喜の言葉を発しながら、鯛三はまたため息をついた。これは好奇心で引き込まれた客が落としていった金だ。こんなことが長続きするわけがない。そうかんがえれば、私が彼女にさせたことは、稚拙で愚鈍なことである以外ない。さすがに、明日からの軽蔑の眼差しは、覚悟しなければなるまい。憂鬱な気分と歓喜の気分が交錯した。鯛三は頭をかかえた。明日から、英美に、どう接すればいいのか。英美の言い分に、自分の過去が重なった。

3

翌日、鯛三はいつもより早く目覚めた。店のシャッターを上げ、空を見上げた。夏の朝特有の風の匂い。それに乗って、向かいのうをすぎの前に停まっている仕入れ用のトラックから、魚の匂いがまじっていた。市場は県内にはなく、カツヨが自分で隣の県まで仕入れに行っていた。トラックの後ろで、せわしなくスチロール箱の魚を運び出している。

「おはよう。朝から精が出るね」

鯛三は声をかけ、トラックの中を覗き込んだ。

「せがれが手伝いにも来やしないんだ。私がやるしかないでしょうが」

「彼も店の準備で忙しいんだろうさ。いいじゃないか、立派に独立して、店を経営しているんだから。どれ、私が手伝おうか」

鯛三は大きなトロ箱に入ったシイラを持った。体長は1メートルを超えている、大物だ。

「立派なシイラだね。こりゃ重い。一人じゃ大変だろう」

「せがれが居た頃は、まだ楽だったがね。喫茶店なんて儲かるもんなのかねえ」

「どうだろうね。でも、いつも客は入っているようだし、繁盛しているのではないかね」

「どうだかね。そのうち、またうちで働く、なんて言い出したら引っ張り出してやる」

珍しく、カツヨは鯛三と普通に話していた。鯛三としては、昨日迷惑をかけたことを詫びるつもりで顔を出したのだが、いつもより柔和な話し方をするカツヨに、普通に会話してしまっている。思い出したように、鯛三は切り出した。

「そうだ。昨日はすまなかったね。うちの客が迷惑をかけてしまって」

聞こえているのかいないのか、カツヨは見向きもしなかった。
「私の不行き届きでね、あそこまで混雑するとは予想していなかったんだよ」
鰤の入った箱を降ろすと、カツヨは大きく伸びをして、腰を叩いた。
「まあ、仕方ないわね。変わったことをすれば、野次馬も集まるわよ。おかげでうちも売り上げがいつもより少し多かったし、迷惑なことばかりではなかったわよ」
カツヨの言葉に、鯛三は心底安心した。晴れやかな気持ちが戻り、魚を運ぶ手に力が漲った。

「ありがとう。やっぱり男手があると助かるわ。今日はいつもより多く仕入れたもんだから」
カツヨは額の汗を拭った。鯛三も、全身に汗を滲ませていた。
「なんの。これからは遠慮なく頼みに来てくれればいい」
「昔はよく、手伝いに来てもらっていたわね。ずっと昔」
遠い目をして、二人は木箱に腰を降ろした。懐かしい風景が、目の前に広がった。
「先代の頃だね。私たちも市場についていったこともあったね」
「そりゃあ楽しかったわね、市場は。子供心をくすぐられたわよ、私は」
カツヨはもう一度、汗を拭った。今日はまた一段と暑くなりそうだ。
「産まれついての魚屋だね、カツヨさんは」
いつものトゲのある言葉は出てこない。鯛三も、なんとなく童心に還った気がした。今のように、商店街も通路も舗装されていなかった。店の数も今ほどなく、うをすぎは一番大きな店構えだった。その店前で二人はよく遊んだものだった。胸いっぱいに深呼吸すると、鯛三はふと、英美のことを思い出した。そして、自分の記憶も。
「哲郎さんが越してこられたのは、いつだったかね」

「よしてよ。死んだ亭主の話なんて」
「いや、すまないね。なんとなく、あの頃を思い出したんだ。すまない」
暫く、静寂が続いた。遠くでヒグラシが鳴いている。
「そうだ。ずっと謝ろうとおもってたことがあるのですが」
カツヨは随分下手に出たような言葉を発した。
「私は謝ってもらうことはなにも」
「いいえ。私、いつも仕事中は言葉がきついから、平坂さんにも随分酷い言葉で言ったとおもうんです」
鯛三は微笑んだ。確かに営業中は威勢のいい言葉が多く、鯛三は気圧され気味だった。しかし、それだけで腹が立つということはなかった。
「いいじゃないですか。仕事に誇りを持って、一所懸命やっておられるんだ。むしろ、魚屋にはそれくらいの威圧感があっていいとおもうよ」
カツヨは思いつめたように俯いていた。静寂が、二人を包んだ。
「あの時、あなたの言葉を受け止めていたら」
カツヨは呟いた。否定するように鯛三は首を振った。
「もう、そのことは言わない約束だったじゃないか。お互い、伴侶を迎えて、幸せだったのだから」
「死んだ亭主の話を切り出したのはあなたでしょ。お互い様ですよ」
カツヨは微笑んだ。鯛三も、笑顔に応えた。
「ああ、お互い様だ」
二人だけの時間が過ぎていった。また、喧騒に包まれた日常に戻る。うをすぎは、いつものように客への対応に追われ、平坂洋服店は、英美のファッションショーによって野次馬への対応に追われるだろう。二人はただ、この二人だけの時間を大切にしたいとおもった。
「さて、準備しなきゃ。ありがとう。助かったわ」
笑顔を見せるカツヨに、無言で手を振って、鯛三は自分の店に戻

った。

開店前。掃き掃除をしていた鯛三は、秋村初音を見かけた。彼女は商店街の片隅にある、小さな店舗を借りて、手芸教室を開いていた。手芸用品を扱う店になったのは、1年ほど前からだった。その姿に、鯛三の目は釘付けになった。初音の着ているその服は、昨日桃地が買っていった商品だった。初音に直接売った記憶はない。となれば、これは桃地が渡したとしか考えられない。訝しく思った。桃地には細君がおられる。ほかの女性に、プレゼントとは。しかも、買っていったときに、桃地は妻に、といっていたはずだ。鯛三は訝ったが、他人の行動にとやかく言えるわけもなく、会釈しながら通り過ぎる初音を見送った。

いつも通り、英美が衣装を着て、最後のチェックをしていた。鯛三はレジスターの前に座って、また初音のことを思い出していた。初音は桃地より五歳ほど年上だったが、年齢より若く見える。桃地に限らず、商店街の皆が愛想の良いその老人を慕っていた。となると、桃地のした行動は、なにか世話になった礼をしたのか。それにしては洋服を送るなど、あまり呈の良いことではない。菓子折りでも持ってゆくのが普通だろう。となれば、やはり、好意を示すために送ったのだろうか。若い連中ならまだしも、老いた他の2人に、そんなことができるものなのだろうか。不倫。そんな言葉が頭をよぎった。

「平坂さん。もう開店ですよ」

気づくと、英美が不思議そうな顔をして隣に立っていた。

「あ、ああ。準備はできてるよ」

慌てるように、半開きにしていたシャッターを上げに向かった。

英美のマネキンは、早くも商店街では当たり前の風景になりつつあった。通りかかる人たちも、自然に通り過ぎ、自然に立ち見していた。奇異な雰囲気は、もう薄らいでいた。

昼を過ぎるまでに、３人の客が来た。１人は物色するだけで何も買っていかなかったが、２人は英美と洋服の着こなしのことなど話しながら、選んだ服を買っていった。これもまた、以前のこの店ではなかった風景だった。鯛三の対応も、ごく自然なもので、ずっとやってきたことをやっているような感じだ。

昼の食事を終え、店に戻ると、店前で秋村初音がなにか躊躇うように立っていた。ふと鯛三と目が合うと、恥ずかしそうに会釈をした。秋村は、間違いなくここで売られていた洋服を着ている。それを買っていったのは、桃地である。つまり、桃地は、妻に買ってやると言った洋服を、秋村にプレゼントした、ということだ。

冷徹で鉄面皮な桃地からは、およそ想像もできなかったことだが、事実は、今、秋村が着ているその服が語っている。

「どういうことだ」

なんとなく真実を認めたくない気持ちと、他人の動向を詮索したくない気持ちで、鯛三はあえて疑問詞的な思考を繰り返した。秋村は、よそよそしく、店内に入ってきた。

「こんにちは」

「ああ、いらっしゃいませ」

少しうわずった声で秋村を招きいれた。鯛三は、少し対応に戸惑った。

「良いお召し物ですね」

「え、ええ。そうですね」

他人が聞いたら吹き出しそうな会話だった。鯛三は自分が売った、自分の店の商品を褒める。褒められた秋村は、おそらく、その服がここで買われたことを知っていて、それを認めた。鯛三は、ここに居づらい気分になった。

「平坂さん。少しお尋ねしたいことがあるのですが」

鯛三は、そらきた、と思った。秋村のその問いは、およそ察しがつく。ここで桃地さんがお買い物をされませんでしたか、と。さあ、

どう答える？腕組みをしたい心境で、秋村の言葉を待った。
「このお洋服、おいくらぐらいするものでしょうか？」
秋村の問いは、鯛三が思ったものとは違った。ここでまた、鯛三の思考は著しく方向転換を余儀なくされたのだ。正直に、うちの商品で、値段は税込み一万二百九十円です、と答えるか。それとも、うちで売るなら、などと言う答えで、桃地にアリバイを作ってやるのか。しかし、考えている余裕はない。少し考えたふりをして、鯛三は答えた。考えに考え抜いた答えを吐き出した。
「ああ、確か卸値は６０００円ほどのものですね。問屋で見たことがあります」
洋服店らしい答えではあった。しかし、秋村は訝しげな表情をしていた。無理もない、卸値を言われたところで、素人に売価がわかろうはずはない。ただ、卸値以上の値段はするのだということを納得したのか、秋村は大きくため息をつき、そうですか、とだけ答えた。
「しかし、よく似合ってらっしゃる」
鯛三はまた、誤魔化しのような言葉を投げかけた。
「うん。よく似合ってますよ」
ふいにショーウインドウから英美の声が聞こえた。英美もこの服が桃地の買っていったものだということは知っているはずだったが、それ以上のことは言わなかった。恥ずかしそうに秋村は俯いた。
「すみません、お買い物もしないで、つまらないことをお聞きして」
「いいえ、またごゆっくりお買い物にいらっしゃってください」
鯛三の言葉に安心したのか、深く会釈をすると、秋村は足早に店を出て行った。
「いいねぇ。あの歳でも恋愛ってできるんだ」
英美はショーウインドウから、秋村に手を振りながら、そう呟いた。やはり、桃地と秋村の関係を、そういう方向に考えていた。
「君も、そう思うかね」
「だって。そういうことは若いこのほうが敏感ですよ」

「しかしだね。まだ推測の域を出てはいない」
鯛三はあくまで否定的な思考を繰り返した。英美のほうが若いだけ、純粋にそれを感じ取っているようだった。
「私は今、恋しているんですから。そういう時って、他人の似通った部分に敏感になるものなんですよ」
それを聞いて、なんとなく鯛三は苛立った。
「喋ってないで、マネキンを続けなさい」
「はーい。あ、一馬さん、こっち見てくれてる」
人の気も知らないで、英美ははしゃいでいた。鯛三は、足元のゴミ箱をポン、と蹴った。

「私は桃地さんに、何も詮索するつもりはないよ。桃地さんは客としてうちの商品を買った。それを誰が着ていようが、私には関係ないんだよ」
引き戸越しで着替える英美に、呟くように話しかけていた。まるで、自分が悪いことをして、言い訳をしているようだった。
「でもさ、あのおじさんは家内に、って言ってたじゃない。そこで話は、ずれているよね？」
英美との会話は、相変わらず噛み合わなかった。若い連中は、現実を直視して、ありのままのものを受け止める。大人はそうじゃない。どこかで現実を否定してゆき、どうでもいい他人の行動を捻じ曲げて考えてゆく。それはまるで、自分の咎を消したがるような思考だった。
「君らの言う恋愛とは、違うものだよ」
「それは、そうだけど」
衣擦れの音が止んだ。
「あ、平坂さんだって、あれが恋愛に関わる行動だって認めてるじゃん」
鯛三の言葉が詰まった。揚げ足を取られた。ますます居づらく、話しづらい雰囲気になった。

「とにかく、忘れよう。我々には関係ないことだ」
半ば強引に、話を切った。無用な詮索だ。洋服屋は洋服を売っていればいい。売れた洋服の行方なんて、知ったことではない。鯛三はかぶりを振った。

4

翌日、一番に訪れた客は、意外な人物だった。平坂洋服店の隣で喫茶店を営む、カツヨの息子、幸二だった。年齢は三十七、高校時代はラグビー部で活躍し、その隆々たる肉体は今でも健在だった。小さい頃から評判のガキ大将のいたずら好きで、母親のカツヨはよく他の店に頭を下げに回っていたものだった。子供のいない鯛三にとっても息子のような存在であり、父親を早くに亡くした幸二もまた、鯛三を父のように慕っていた。

「やあ、幸二じゃないか。店は隣りなのに、ご無沙汰だね」

鯛三は幸二を呼び捨てで呼ぶ。生まれついての知り合いだし、杉田家とは昔から家族ぐるみの付き合いである。なんの遠慮もない間柄なのだ。

「いやあ、店が軌道に乗るまでは、なかなか顔を出しにくくて。最近やっと慣れてきたんですよ、喫茶店のマスター」

「そうかい。店がうまくいっているのか。カツヨさんにも報告はしているのか？」

「それがねえ。おふくろは知ってのとおり頑固者だし、いまだにうをすぎを継がなかったことを根に持ってるんですよ。少しぐらい店がうまくいってたって、そんなに長続きするもんかい、って一蹴されるのがオチですよ」

「まあまあ、そういわず、一言声をかけたほうがいい。何を言ったって、親子じゃないか。口には出さなくともいつまでも子供の心配をするのが親ってもんだよ」

「まあ、どうせ報告しなきゃいけないこともあるし、そのついでに店のことも報告しときますよ」

「なんだい、報告って」

「いやあ、実は」

てれくさそうに頭をかきながら、幸二はレジスターの隣に腰掛け

た。
「俺、結婚することにしたんですよ。まあその、いわゆるできちゃった結婚ですけど」
「ほお、なに、子供ができたのか」
「ええ。相手は店の常連の女でして、親しくしているうちに付き合いだしたんですが、ついこのあいだ妊娠していることがわかったんです」
「ふむ。しかし幸二、そんな重大なことは、私ではなくカツヨさんに真っ先に報告すべきことじゃないか。なぜいままで黙っていたんだ」
鯛三はあくまで冷静にだが、少し子供をいさめるように語気を強めた。
「それですよ。それで今日、親父さんに頼みがあってきたんですよ。あのおふくろのことだから、何を言い出すかわかったもんじゃない。で、親父さんに仲介に入ってもらいたくてお願いにあがったんです」
鯛三はあごをさすりながら、うーん、と唸った。確かにカツヨは偏屈なところがあるし、世間体を気にして相手を妊娠させたことを苛烈に責めるかもしれない。責任は幸二にあるのであって、あくまで親子間で解決させるべき問題ではあるが、鯛三とて息子のように接している幸二のためをおもうと、父親として和解の糸口を探してやるべきかもしれない。
「まあ、お前が言い出しにくいのもわかる。だから付いていってはやるが、あくまでこれはお前自身の問題だからな。どう言われようと、最終的に問題を解決するのはお前だぞ」
「わかってますよ。恩にきます」
「そうか。幸二が父親になるんだな。大きくなったもんだ」
「その言い草じゃ、まだ俺を子供扱いしてたんですね。俺ももう三十七ですよ」
「そうだな。しかし感慨深いよ。お前は私にとっても息子のようなものだからな」

二人が昔を懐かしんで話が盛り上がってきた頃に、客が一人入ってきたので、幸二は名残惜しそうに席を立った。
「それじゃあ親父さん、今夜実家のほうへお願いします」
「ああわかった」
店の外は、朝にしては通行人も多く、賑わいを見せていた。英美はポーズを変えながら時折手を振ったりしている。もしかしたら、うをすぎのアルバイト、一馬に手を振っているのかもしれない。鯛三も気持ちを切り替えて接客に戻った。
「いらっしゃいませ。どういったものをお探しでしょうか」
「今度、同窓会に出席するんですけど、どうせなら新調しようかとおもって」
五十も半ばを過ぎたくらいだろうか、小太りの主婦は鯛三と目も合わせず商品棚を漁った。
「それでしたら、こちらのスーツなどいかがでしょうか。あまり派手なものより、これくらいのものが品良く見えるかとおもいますが」
「そうねえ。じゃあこれ、試着させていただけます？」
「ええ、では、こちらでどうぞ」
小さな試着室に客をいざなうと、鯛三は手持ち無沙汰になって商品棚の整理をはじめた。
「いまお店を出て行かれた方、うをすぎさんのところの息子さんじゃありませんでした？」
主婦は試着室でごそごそやりながら、ふいに鯛三に話しかけた。
「ええ、そうですが」
「ご存知ですか？あの息子さんの交際相手のこと」
中年主婦特有の噂話がはじまった。鯛三もこういうことには慣れていて、いつもなら適当にあいづちを打ったりして愛想をする。深入りしてしまっては際限がないからだ。しかし、幸二の交際相手、つまり今さっき聞いたばかりの、結婚相手のことだとすると、これは聞き捨てならないことだった。
「さあ……。交際相手がいることまでは聞いておりますが」

試着室のごそごそが止んだ。どうやら主婦は話し込む体制にはいったらしい。鯛三も思わず身構えて聞く体制にはいった。
「なんでも、隣のC町の旧家の娘さんだそうで、由緒ある家の方なのに、ふらふら遊び歩いていて、あまり評判のよろしくない娘さんだそうよ」
「はあ……」
「さすがに旧家のお嬢さんらしく、立ち振る舞いは上品に見えて、男にはそうとう好かれるタイプですって。だから男性遍歴も並みのものじゃないだろうって言われてるのよ」
鯛三は返事もできないまま、棚を整理していた手を止めて聞き入ってしまった。この主婦の言い方なら、噂はあくまで噂であるかもしれない。しかし、火のないところに煙は立たぬ。男遊びのなれの果てに、幸二とのあいだに子供をもうけた。そんなことで、そのお嬢さんは満足するのか。息子同然の幸二の祝事を慶ぶ気持ちでいっぱいだった鯛三の心に、暗雲がたちこめた。
「それでね、もしその二人が結婚でもしたいなんて言い出したら大変なことになるんじゃないかって、このことを知ってる人たちの間じゃ大騒ぎよ。相手は旧家のお嬢さんで、ご両親も相当昔かたぎの方で、ただでさえ遊び歩いていた娘のことを良く思わないでいたのに、魚屋の息子さんと結婚なんて、許すはずないじゃありませんか。それにうをすぎの奥さんだって、頑固な方でしょ。とてもお互いが折り合うとはおもえないわ」
どうやらこの主婦はこの近辺のことはよく知っているが、鯛三が杉田家と旧知であり、幸二が息子のような存在であることまでは知らないらしい。だから細大漏らさず、なにもかも知っていることを話したのだ。
「ところで、そちらのスーツのほうはいかがでしょうか」
「そうねぇ、もう少し明るい色がいいかしら」
「ああ、それでしたらこちらのスーツもお試しください」
聞くに堪えない噂話を、鯛三は強引に断ち切った。主婦のほうも、

あらためて試着のほうに集中したようだった。まだ鯛三の頭の中は混乱していた。この客が帰ったら、少し頭の整理をする時間がほしい。

主婦が買い物を済ませて店を出ると、鯛三はいてもたってもいられなくなっていた。

「英美くん、すこし店をまかせてもいいかね。なに、三十分ほどでいいんだ」

「ええ、いいですよ」

無論、鯛三が向かう先は、隣りの喫茶ホリデイだ。さっきの主婦の話を聞いてしまったからには、二人の出会いからのいきさつをはっきりと聞き出し、幸二自身が、相手方のことを知り、理解しているかを確かめる必要があった。もちろん、子供ができてしまったという現実を推して考えれば、結婚して所帯を構えることは免れようがないにしても、親族の和を&#3236３;ぐことの必要性を、幸二が理解しているかどうか確かめたかった。

ホリデイにはすでに何人かの客がいた。見るからに営業マンのような背広姿の男、歓談する主婦たち。そんな客たちの先に、忙しく仕事をしている幸二の姿があった。

「いらっしゃい。ああ、親父さん。店のほうはどうしたんです」

鯛三に気づいた幸二は、一息つく間にありついたように、にこやかに微笑んだ。

「うん、ああ、たまには少しコーヒーでも飲んでみようかとおもってな。英美くんに任せてきた」

まさか、この人の中で、あのような話題が切り出せるわけもなく、鯛三はとりあえずその場を取り繕った。

「あの子、英美ちゃんっていうんですか。あの子が来てから、お店のほうも忙しくなったみたいですね。やっぱり、商売ってのはアイデア勝負ですねえ」

「いやあ、私はあまりにも突飛なことをいうもんだから、最初は反対したんだ。普通はそうだろう？しかし、結果として売り上げは

うなぎ上り。認めないわけにはいかない。いまだに私は、これでよかったのかわからないでいるんだ」
　幸二の手元から、香ばしいコーヒーの香りが漂ってくる。注文したコーヒーの味は、この焙煎した香りからして期待を裏切らないものだろう。一口すすって落ち着くと、鯛三は本来の用事を思い出した。
「そんなことより、その、お前のお相手のことなんだが、大丈夫なのか？」
「親父さん、言ってることの大事な部分が抜けちゃってますよ。なにが大丈夫なのか、なんです？」
　鯛三は周囲を気にしながら、先程耳にした事柄を手短に話した。
「ああ、そういうことですか。確かに、おふくろのことは気にしていますよ。けど、最後に決めるのは俺だって、そう言ったのは親父さんじゃないですか。たとえ揉めても、認めていただくまで、俺なりに誠意を伝えるだけです」
「まあ、そうなんだが」
「親父さん、彼女のおなかの中に俺の子がいることは事実だし、まさか堕胎なんてことを考えないかぎり、なるようにしかなりませんよ。それに、俺は彼女を愛してる。大地主の娘とか、魚屋の息子だとか、もうそんな身分の違いなんてある時代じゃないですよ。人類みな平等、きっと彼女のご両親も理解してくれます」
「そうか。わかった」
「それと、彼女の素行のことですが、確かに男遍歴はかなりのものらしく、本人から自慢げに話してくれましたよ。正直、面白くない気持ちがないでもないんですが、その遍歴のおかげで俺と出会ったんだとおもえば、むしろ運命的だとおもいませんか」
「ふむ。お前は実にポジティブなんだな。私みたいな旧い人間には、到底うかばない思考だよ」
　苦笑いをコーヒーの苦味でさらに苦々しくしながら、鯛三は少し安心した。これなら上手くいくだろう。世間の風評がどうあれ、こ

の明るさで乗り切ってくれるだろうと、胸の空く思いで、鯛三は席を立った。
「これで安心して、目通しに出席できるよ。ごちそうさん、いくらだい」
「お代はいいですよ。心配させたおわびに、サービスしときます」
そんな気楽な言葉に無言で手を振り、鯛三は店を出た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4369c/

しあわせ商店街

2010年10月28日08時24分発行